市長就任記者会見　概要

■日時：平成 30 年 12 月 25 日（火）　午後 2 時 00 分から午後 2 時 36 分まで
■場所：市庁舎第４会議室
■相手方出席者：神奈川新聞社、朝日新聞社、毎日新聞社、読売新聞社、東京新聞社、共同通信社、テレビ神奈川、ジェイコム湘南、時事通信社
■市側出席者：桐ケ谷市長
■陪席者：米山企画課担当課長、仁科広聴広報係長、広聴広報係　蛭間主事
■配布資料
　〇記者会見要旨
■内容：下記のとおり

【桐ケ谷市長】

- 本日から逗子市長を務めることになった。私はこれまで、商工会並びに観光協会という会長の立場で逗子市との関わりはあったが、行政に対しては本当に未経験である。これまで私は経営一筋でやってきた。赤字の経験も何度もしたし、その都度赤字のときにどうやって立て直しをするか、こういう経験をしてきた。また材木の商売から、今はまだ材木屋をやっているが、9 割が建築の商売という業態の転換をしてきた。こうした経験を何とか行政の中で生かしていけるものを見つけ出していきたいと考えている。皆様にレジュメをお渡ししてあるが、このような流れでお話をさせていただく。
- 初めに、逗子市を取り巻く環境、これは大変に厳しくなっているし、変わってきているということだと思う。ご存じのとおり、このベッドタウンと呼ばれるところは、どこもかしこも大変厳しい環境になってきているものと思う。逗子市も例外ではない。これはやはり産業を持たない地域で、住宅、住む場所としてまちを運営していくこと自体が大変に厳しくなるだろうと思う。逗子の場合、まさにそれがビジネスモデルが変わってきたと言えるかと思う。
- 逗子の場合は、昭和 40 年に小坪地区の亀ヶ岡団地、通称亀団と言うが、亀団の造成がされ、搬出した土砂が小坪湾に埋められて今の逗子マリーナができている。その後、アザリエ団地とか、ハイランド、こういったところが随所開発された。昭和 40 年に 42,000 人だった逗子のまちが、10 年間で 57,000 人にまでなった。最大は 60,000 人弱までいって、今また 57,000 人のまちとなっている。ほぼ 40 年から 50 年にかけての 10 年で逗子の原型ができてきた。その間がまさに高度成長時代であり、いわばあこがれの庭付きマイホームというところに人がどんどん移り住んでいった。その人たちが本当に頑張っていただいて、役員になったり社長になったりということで、税収を押し上げていただいた。かつては、逗子は本当に全国的にも裕福なまちとして知られるようになった。しかしそれもやがて年金生活へと変わってきて、低迷を迎えている。これはもう予想し

うる将来であったはずで、これに対する次の手立てが実はなかった。これが今の実情だろうと思う。

- ではなぜ、子育て世代が逗子に入ってこないのか。当時は7割が専業主婦であった。したがってちょっと郊外型の住宅地で、奥様がまず朝ご主人を送って、次は子どもたちを駅へ送って、午後になると子どもを迎えに行って、最後にお父さんを迎えに行くと。こういう専業主婦7割の時代は、これがちゃんと機能していた。今これが逆転している。7割が共働き。そうなると、逗子のちょっと不便なところには住みにくいという。そして、川崎とか東京近郊の場所、昔は工場のあった場所がどんどん再開発をされて住宅に変化して、武蔵小杉などは高層化されて、人が移り住むようになった。共働き世帯になると、家に対する要求もどんどん変わってくる。それが今逗子において特に顕著になってきているのだと思う。したがって、年々高齢化率は上がっていく。若い人たちを次の手立てで呼び込まない限り、人口の流入が厳しい、こういう状況に置かれている。
- そこで、この先逗子をどうしていくのかということだが、2番目に書いてある、財政再建。今回私は選挙戦を通じても、本当にこの財政再建を一丁目一番地として訴えてきた。こうした収入の在り方が大幅に変わってきている今、この個人市民税のみに頼る一本足打法では、おそらく今後も厳しい環境に変わりはないと。少しでも別の角度からの収入もしっかりと入れていかないと成り立たないと考えている。確かに海あり山ありの、非常に逗子としての魅力はあるが、ただそれに一方的に頼るだけで人が集まってきていただける、これは非常に難しい面があろうかと思う。財政再建の方法、これは入りと出のバランスをどういう風にとるかというところであって、入りは一所懸命いろんな角度で図る、また一方でそれをどういう風にして調整できるのか、この入りと出のバランスからこの行政の立て直しを考えていきたいと考えている。
- 入りに関しては、何とかして逗子にふさわしい企業を誘致したい。これは、逗子に例えばゆかりのある企業とか、非常に逗子に協力的な企業に働きかけをしていくが、そのために何よりプロジェクトチームを立ち上げて、あらゆる情報を吸い上げて、そこから候補会社にトップセールスをかけていって、誘致をお願いしていく、これが一つである。
- もう一つは起業する人たち、創業する人たちへの支援を続けていこうということである。これは今、働き方改革がおそらくいろいろな意味で味方をしてくると考えていて、将来その中から逗子の中核を担う会社の出現も願っているという考えである。今、フルに東京に働きに行かなくても、例えば週3日は東京に行くが、残りはこっちで仕事ができる、そんな環境もおそらく早晩やってくると感じている。それに向けたインフラの整備と、民間の業者の人たちと連携しながらやっていきたいと考えている。
- また、本店移転を促していく。これは大きな会社がドンと来ても、実際にここの地元で働いている人によって税収に再配分されるので、あまりそれ自体に魅力はないが、例えば、オーナーカンパニーの資産管理会社とか、もともと社員数がいないところでしっかり収益があげられる会社、こういったものを何とか誘致しながら逗子市の税収に貢献

していきたい。

- 今日午前中に部長会議を行った。その中で指示したのは、とにかく国もしくは県のお金を引っ張ってくる、これも立派な外貨の獲得。これには市の職員、本当に部長、課長、主任、皆さん是非力を合わせて外貨の獲得に励んでくれというお願いをした。
- 一方、出の部分に関して、将来の日本が襲われる少子高齢化・人口減少。この中の数値でいくと、逗子市も 2040 年に 47,000 人になるであろうという推計が出ている。今から 10,000 人以上減ってくる。こうした状況も踏まえて今から行政のスリム化に何年計画でどのように取り組めるのか、このロードマップを作っていきたいと考えている。
- 教育に関して、早急に復活を検討したい項目、それは少人数指導教員の問題、学習支援員の問題、心の相談員の問題、土曜のふれあいスクールの復活、そして校舎の修繕、緊急必要とするもの。また、多くの方々から要望が出ていた図書館の時間延長、返却ポストの復活というもの、小学校通学路の交通整理員をもう一度復活させてほしいと言われていた。それに小児医療費助成の拡充、これも強い要望があった。これらを限られた予算となるが、できるものから可能なものはこの年度末までにできるものは進める。しかしどうしても予算の関係があり、厳しいものは来年度予算の中から復活を目指してやっていくという考えで、各職員にお願いをしたところである。
- 4 番目の福祉については、早急に復活を検討するものは、高齢者センターの浴場の再開、これも当初秋を予定していたが、先ほどの会議で何とか前倒しにしてほしいという要望をして、今 7 月再開を目途に準備に入るということにした。
- 今回選挙にあたり、いろいろ市内を歩いた中でやはり今後の検討項目としては生活の足としての交通手段、これを早急に何とか確保したいと考える。というのは、先ほど申し上げたように、山あいを崩して逗子は造成地がつくられた。そのため平らなところはまずない。中にはかなり急な斜度、このままスキー場にできるのではないかというくらいの斜度のところも中にはある。こうした中に免許を返納してからどうやって生活をしていくのかという切実な声をたくさん聴いた。逆にそれを見越して、逗子を脱出しようとする方々もこれから増えてくるかもしれない。そうしたことを踏まえて、何とか生活の足を確保、これは様々な問題があろうと思う。道交法の問題、もしくはバス・タクシーとの民業圧迫の問題があろうと思うが、この足の確保がなければ生活が成り立たない地域もかなりあると思う。何とか調整していきたいと考えている。
- 一方、県下一元気な高齢者のまちにしたい。目的は二つあり、一つはご本人も健康でハッピー、そして行政から見ても医療費の削減につながり、まちの健全化に大きな手立てとなる。この両者ウィンウィンの関係を何としても目指して、その方向に向かいたいという考えである。実はお隣の葉山町は県下一番、こういうふうに町長がおっしゃっていた。逗子はそのときの指標で言うと 24 番目。約 50,000 円の差がある。そうすると、逗子市の高齢者人口 14,000 人にかけ合わせると、逗子市の場合は葉山町よりも 7 億円多くかかる。これはまちにとっても、ご本人にとってもプラスではない。これを、目指せ

葉山、それを超えた一番、こういった目標を掲げてそのための政策をどうするか、これを関係部局で考えて決めていきたい。

- 次に病院問題について私の考えを述べさせていただく。この総合病院は市民の大きな願いであるし、私も必要と考える一人である。しかし、今回の葵会と進めている病院の計画については、本当に市民にとって望ましい病院なのかというのをもう一度確認する。それから長年逗子の医師会と行政の方ではあまりいい関係とは言えなかった。この医師会との関係をしっかりと軌道修正し、かつ、葵会の方とも改めて協議の場を設けるということを今思っている。そこでしっかりと連携が取れるようなそういう関係をまず作り、そして前に進んでいく、そういう考えである。今聞いている限りでは、病床数の決定まではまだ時間がある。その間にしっかりと詰めるところは詰め、見極めしていく。したがって、拙速な判断ではなく、衆知を集めてしっかり進んでいきたい。
- 次に防災について。今、逗子市の防災関係、避難所不足の数値は被害者数が 29,510 人と言われている。現在避難所で収容できる避難者数は約 20,000 人のため、10,000 人弱は不足しているということになるが、ここは民間の建物を活用できるように進めていきたいと考えている。まだまだいろんな災害、例えば津波のときに使える場所、土砂災害のとき使える場所、それぞれ違いはあるが、それぞれをきちっと住み分けしながらやっていけば、その必要数はおそらく充足できると考えている。
- 何よりも大事にしたいのは、防災訓練の徹底。私は東日本大震災、特に陸前高田に当初から支援活動をし、いまだに継続しているが、あの惨状を見ていくと、あれがもし逗子市で起こるならば、果たしてどうなるのか大変に恐ろしい。特に、初動の対応がずれると、大変な状況に被害が拡大する恐れが十分にある。そうした点で、本当にこの初動の態勢を見誤らないための訓練を日頃から徹底して行うべきだと考えている。東日本のような、もともと地域の連携が強い地域ですらあのような惨状であった。それが、隣近所の関係がわからないくらい希薄な地域において、もし同様の惨状があった場合は半端ではない、考えられないほどの状況になるであろうと推測する。そうしたことを本当に日頃からの訓練、それは形式的な訓練を何回やっても意味がなく、本当に緊迫感を持った訓練を何度も積み重ねていく必要があろうと考えている。
- 一方、まちづくりについては、短期ではないもう少し長期の問題ということになるが、東逗子の賑わいを何としてでも作り出したい。それから小坪海浜地区を活性化する、これは逗子ってどこと言われると、鎌倉と葉山の間が逗子ですと、こういう枕詞がなければ説明がつきにくい逗子のまちであるが、おそらく世界にも訴えられるであろう逗子マリーナのあたりの景色、こうしたところを上手に使って国外に発信して日本に逆輸入するのか日本の中に発信するのか方法はいろいろだが、もう少し逗子のバリューを上げていく。それには小坪の活性化、これらにはまだまだ手があるのだと。とてもオリンピックまでには間に合わないと思うが、早急にこういったものも作りたい。地元と後は商工会をうまく連携させながら進めていきたいと考えている。

- 最後になるが、私は現場第一主義でこれまでも自分の事業をやってきた。これからも貫いていきたいと思っている。答えは現場にある、というのが私の考えで、これを徹底していきたい。今回選挙に出るにあたり、まず現場を知るというところから、タウンミーティングを 100 回やろうと目標を立てたが、結果は 69 回。小さいのも入れるともう少し増えたが、実際は 69 回実施させていただいた。この中で本当にお仕事をしながら子育てをされているお母さんたち、それから高齢者の方々、そして逗子が好きで移り住んできた 30 代、40 代の逗子歴半年、1 年もしくは 2 年とこういう人たちにも話を聞いた。こうした現場からの声というのは、私は一番大事だと考えている。ある意味これからは抜き打ち的に、嫌がられるかもしれないが、現場を見せてもらいながら、本当に自分の肌感覚で感じ取っていきたいと考えている。
- また何よりもスピードが大事だと考えていて、公約にも掲げていた。その方向性は 2 年でお示しできるようにしたい。実際の税収増のもの等は若干のタイムラグがあろうと思うが、4 年かけて方向性では、この赤字の状態が厳しい状況が活かされない。我々も民間でやっていていても、この赤字は最大の改革のチャンスであり、何度もそれを経験してきた。したがって、時間的スピードは大事にしていきたいと考えている。
- 今日、部長会でお話させてもらったのは、できない理由はいらないと。どうしたらできるかを考えてほしい、というお願いをした。これはＪリーグを創設した川淵チェアマンが言われていたことだ。当時、サッカーの観客数は大体 1,000 人くらいの規模のときに、30,000 人収容のスタジアムを作れ、下部組織を作れ、それから企業名ではなく地域名でチームを作れ、プロ野球のように巨人軍はいらない。こういう方針のもと、1,000 人しか集まっていないときに 30,000 人のスタジアムを作ろうというのだから、半端ではないことで、それはできない理由のほうがたくさん出たと思うが、できない理由はいらないと、どうしたらできるか考えてほしいと、これを貫いたのが川淵さんと聞いている。私もこういう難局にあるときには、できない理由を聞いて解決には何もつながらない、どうやったらできるのかと、これ一点で改革を進めていきたいと考えている。おそらく市の職員の人たちも、ちょっと変わった市長が来てしまい大変だと思っただろうが、そこが民間の事業経営をやってきた者として最大の強みだと私は思うし、強みを生かした行政改革を進めていきたいと考えている。

  ありがとうございました

【記者】就任から 1 週間経ったが、初登庁しての感想をお聞かせいただきたい。

【桐ケ谷市長】全市民 57,000 人強の皆様の安心と安全を担っていると、その責任の重さはひしひしと感じた。

【記者】今日初登庁されて職員の方々に迎えられたとき、どんなご挨拶をされたのか。

【桐ケ谷市長】まさにそういった思いを伝えて、あとは今直面している財政問題をやはり知恵を出して乗り切っていこうと、協力を呼び掛けたというところである。

【記者】先ほどお話の中にあった東逗子の賑わいづくり…駅前広場だとかという話だったと思うが、現時点で東逗子の賑わいについて何か考えはあるか。

【桐ケ谷市長】駅前広場が市の所有であるが、あそこは逗子としてもどう開発するかというのが今動き出したところであり、どう活用するかというのが直近の課題だと考えている。

【記者】地元と商工会と話し合いながらこれから考えていこうと。

【桐ケ谷市長】そのとおりである。

【記者】医師会と葵会の間で争っているのは、市と医師会と葵会で。

【桐ケ谷市長】まず私が考えるのは、医師会と葵会の関係では、しっかりと当事者同士の信頼関係がなければ。例えば、患者さんを真っ先に葵会の病院に紹介するという関係がないと、今までどおり南共済や湘南鎌倉に送っているようでは、そこにできた意味があるのかということになる。そういった意味も含めて、医師会、葵会同士がそこでしっかりと信頼関係がつくられるということが大事だと私は考えている。

【記者】医師会と葵会を対話の席につかせると。

【桐ケ谷市長】そのとおりである。

【記者】いつぐらいの時期を目途に。

【桐ケ谷市長】まだこれからなので、何とも。

【記者】来年中前半とか。

【桐ケ谷市長】可能な限りだが。幸い、私の方は医師会とのパイプはある。葵会の方は平井前市長の方がお持ちなので、前市長にも、私はそう考えているのでそういう手伝いをしてほしいというお願いは一応してあるので、たぶん実現は可能である。

【記者】細かい話だが、選挙の時から再三主張されていた本店移転の促進だが、目途というか明るい反応がある、来年の株主総会が終わったあたりからぽつぽつ出てくるとか、そんな感じか。

【桐ケ谷市長】大きい会社の、あるいは上場会社の本体を移すということは、これはまず考えていない。それは難しいと思う。必ず会社は、他にいくつかお持ちだ。一社ということは、まずない。そうするとホールディングカンパニーみたいなところ、そういったところの移動を私はイメージしている。

【記者】それは株主総会の議決がないと。

【桐ケ谷市長】そうである。このままスピード持ってやりたいと思う。

【記者】先ほどのお話の続きで、企業支援、企業誘致にあたっては、どういった逗子の魅力を訴えて来て下さいとお願いされるつもりか。

【桐ケ谷市長】先ほども申し上げたとおり、逗子にゆかりのある企業とか、逗子に協力的な企業。本当は企業誘致というのは、優遇税制を設ける。それをやるだけの体力がないと私は考えていて、もうお涙頂戴で口説きに行くしかないかと思う。したがって、逗子に何かしらつながりがある方々に、まずは第一にお願いに行くことになろうかと思う。

【記者】早急に復活を検討する項目ということで、前市長の時にいろいろと財政難ということで取りやめたものも復活するという話だったと思うが、財源についてはどのようにお考えか。

【桐ケ谷市長】もちろん財源の確保が優先であり、この議会で来年度予算の承認、その中での制約は受けるが、例えば図書館の時間延長、これは非常勤職員の確保などがあるが、このぐらいだったらフルには延ばせないけど、週に何回かは延ばせるとか。また返却ポストについては、回収を外部委託している。そこに費用が発生するならば職員でできないのとか。お金を掛けずに復活できるところはどこか、といったところから始めていきたいと考える。

【記者】選挙前になろうかと思うが、病院の問題で覚書の変更があったかと思う。この中で2020 年度中から 22 年度中に延びたと。あと病床の確保に関しても 30 年度末ではなく工事着手までにというふうに覚書が変更になったかと思うが、これについては何か今のところ何かお考えがあるか。

【桐ケ谷市長】これまでの経緯は見守ったうえで、早まっている方向ではなく遅れているので、時間的余裕はある。それにきちんと体制を立て直して、どういう方向に行くかを見極めるという考えでいる。

以上